

平城宮跡資料館の新型コロナウイルス感染症対策とその取り組み

はじめに 平城宮跡資料館は、国立の博物館・美術館に対する新型コロナウイルス感染症感染拡大防止にともなう政府の要請により、2020年2月27日から2度の延長を経て6月2日の再開まで臨時休館した。このため、開催中であった冬期企画展とその関連イベントを中止することとなった。従来、資料館では解説ボランティアによる展示解説を実施している。これは来館者の満足度を高めるだけではなく、奈文研の研究内容を来館者へ伝えるという面でも重要な活動であったが、この解説活動は「濃厚接触」に該当し、ボランティアの健康面も憂慮されることから、2020年2月26日から現在（2021年3月31日）にいたるまで活動を休止している。本稿では、資料館における感染予防対策とその取り組みを紹介する。

資料館再開館に向けたコロナ対策 2020年4月7日に新型インフルエンザ等対策特別措置法に基づく「緊急事態宣言」が7都府県に発令され、その後全国へと拡大された。奈良県への宣言は5月14日に解除され、感染予防策を講ずることを前提に展示公開施設の開館も容認されることを受け、公益財団法人日本博物館協会作成の「博物館における新型コロナウイルス感染拡大予防ガイドライン」を参考とし、資料館再開館に向けて準備を進めた。同ガイドラインは、展示空間における換気、入館時のマスク着用、手指の消毒ほか、状況に応じて入館者数の制限をおこなうこと等を求めていた。平城宮跡資料館でおこなった主な感染防止対策は次の通りである。

1. 入館時 入口にて手指の消毒をお願いするとともに検温を実施した。当初は非接触型体温計を導入していたが、円滑な運用のため10月よりサーモグラフィを導入した。またマスク着用を入館の条件とし、未着用の方には受付でマスクの購入をお願いすることとした。受付には飛沫感染防止のため、ビニールカーテンを設置し、パンフレットは入口横の机に置き、手渡での配布はおこなわないこととした。その際、パンフレットにそれまで出口に設置していたアンケート用紙と使い捨てペンシルを挟んだところ、アンケートの回収率が格段にあがった。回収率の上昇で、来館者の反応や意見を得ることができたことはコロナ禍での恩恵といえるかもしれない。

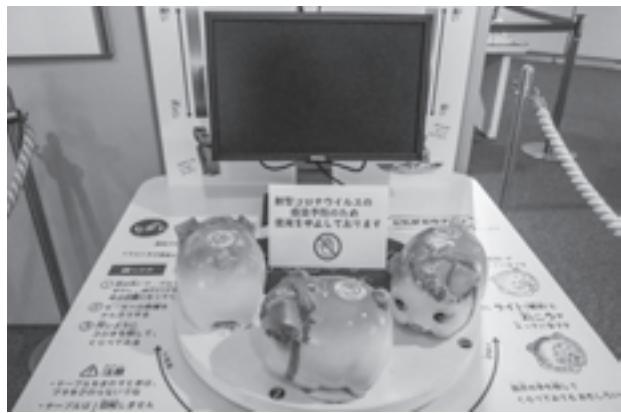


図76 休止しているハンズオン展示

2. 館内の設備・換気 来館者同士が密になるのを避けるために、館内を一方通行とした。また、資料館出入口と職員通用口を1時間おきに開放し、5~10分程度の換気をおこなうこととした。館内の設備利用については、コインロッカーやトイレ内のジェットタオル利用を中止し、休憩スペースの共有する物品（テーブルや椅子等）についても座席数を減らし、定期的な消毒を徹底している。また、来館者が手指消毒するためのアルコールを接触の機会が多いと想定される場所に設置した。

3. 展示 資料館には5つの常設展示コーナーと企画展示室があり、各コーナー入口に「マスクの着用」「人とはなれる」「作品、展示ケース、壁に触らない」「会話をひかえる」のサイン表示をおこなった。資料館最奥に位置する考古科学コーナーは埋蔵文化財センターの各研究室の業務内容についてハンズオンを多用して紹介しているが、直接手で触れることを魅力とするハンズオン展示は、その分感染リスクも高く、消毒作業の徹底も困難であるため、2021年3月31日現在も使用を休止している。

再開館後の入館状況 資料館の2020年度（4月~2021年2月）の入館者数は35,119人であり、前年度同期の71,408人と比べて、2分の1程度落ち込んだ。新型コロナウイルス感染拡大を受けて4月・5月は休館しており、休館中に、例年多くの来館者が訪れるゴールデンウイークが含まれていたこと、都道府県をまたいだ移動の自粛が求められたことが要因と考えられる。月別（4・5月の休館期間を除く）では平均して4割程度の減となったが、緊急事態宣言解除後の6月、2度目の緊急事態宣言が発令された2021年1月は6割以上の減となった。

コロナ禍における展覧会 平城宮跡資料館では、年に数回、企画展を開催している。毎年秋に開催している「地下の正倉院展」は、3期に分けて実物の木簡を展示する展覧会であり、多くの来館者にお越し頂いている。しか



図77 「地下の正倉院展」展示会場風景

し、この「地下の正倉院展」も新型コロナウイルスにより通常通りの開催というわけにはいかなくなってしまった。ソーシャルディスタンスを確保するため、木簡の展示数を例年より少なくしてケース同士の間隔を広くとり、来館者が密にならないように工夫した。展示数が少ないとことに対して、来館者からは「展示ケースの距離が広くとられていたため周囲を気にし過ぎず見ることができた」といった意見があった半面、展示数の少なさに物足りなさを感じる意見が非常に多く寄せられた。感染防止の観点から展示品を多く出せないなか、これからの中コロナ時代において、どうしたら来館者の満足度を高められるのかがこれからの課題である。

オンラインコンテンツの導入 新型コロナウイルス感染症の蔓延により博物館の活動が大幅に制限されるなか、多くの館がオンラインでの情報発信に取り組んでいる。平城宮跡資料館では、企画展ごとに開催期間中のイベントとして研究員によるギャラリートークをおこなっているが、2月27日の臨時休館以降、6月2日の再開館後も実施できていない。研究員によるギャラリートークは、来館者が展示の理解を深める点でも重要なイベントであり、実際、普段あまり接する機会のない研究員との交流を楽しみに参加される来館者も非常に多い。そこで、ギャラリートークの代替措置として、オンラインコンテンツの導入を試みることとした。8月にYouTube「なぶんけんチャンネル」を開設、研究員による企画展の展示解説を公開した。「研究員によるミニ解説～古代のいのり－疫病退散！－展～」では企画展内容を細かく紹介し、「ナゾの箱形土製品」では夏期企画展にて展示した遺物に焦点をあて最新の研究成果を交え、企画展が終了しても楽しめる内容とした。「研究員による見どころ紹介！「地下の正倉院展－重要文化財 長屋王家木簡－」」では、会期ごとに研究員がおすすめの木簡を紹介し、会



図78 動画撮影風景

期始まってすぐに配信することで、単なる展示解説ではなく、事前学習の側面をもたせた。動画を視聴された方からは、「YouTubeでは質問ができないからギャラリートークを復活させてほしい」というご意見のほか、「コロナ禍でなかなか来られない人も多いなか動画があってよかったです」「わかりやすく楽しい解説にもう一度展示を見に行きたくなった」といった感想が寄せられた。

おわりに 新型コロナウイルス感染症による展示への影響はしばらく続くと考えられ、感染対策を十分に練ったうえで、休止しているハンズオン展示の再稼働、各種イベントの実施を検討していく必要がある。その一方で、来館を必要としないオンラインを活用したプログラムの提供も継続しておこないたい。オンラインコンテンツの導入は、従来の利用者以外に偶発的な利用者を生み、資料館の利用者層の拡充を期待できる。動画制作は業務の負担となる反面、どのようにしたら興味深くわかりやすい内容となるのか、展示担当者自身も展示内容を熟考する良い機会となるとともに、視聴者数や“いいね”的な数などから反響がわかりやすく、新たな企画立案の参考となる。さらに、利用者にとって、オンライン上で事前に学ぶことで、実物を見たときに親しみや感動を感じるとともに、より深い知識を得ができると考える。2020年、博物館・美術館業界はその活動形態を大きく変えることとなった。ポストコロナ社会においてオンラインでの情報発信は不可欠であり、今後も持続的なあり方を模索しつつ、来館の有無に限らず楽しめるコンテンツを提供していきたい。

(藤田友香里・廣瀬智子)

参考文献

公益財団法人日本博物館協会「博物館における新型コロナウイルス感染拡大予防ガイドライン」2020。